様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月８日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７～２０１０
課題番号：１９５２００９３
研究課題名（和文）　イタリア・ルネサンスにおけるシビュラの研究

研究課題名（英文）　Study of Sibyls in Italian Renaissance

研究代表者
伊藤　博明（ITO HIROAKI）
埼玉大学・教養学部・教授
研究者番号：７０１８４６７９

研究成果の概要（和文）：
イタリア・ルネサンスに発展したシビュラの表象は、古代の『シビュラの託宣』や中世後期のテクスト的な伝統を継承したうえに、15 世紀の人文主義者や新プラトン主義的哲学者の議論を背景に産み出された。その図像的総決算と言うべき、システィーナ礼拝堂天井にミケランジェロが描いた６体のシビュラ像は、８体の旧約の預言者像とともに置かれて、古典古代におけるキリスト教の普遍性を示している。

研究成果の概要（英文）：
The representations of Sibyls, which developed during the Italian Renaissance, were produced by the reception of the ancient Sybilline Oracles and the textual tradition of the late Middle Age, under the discussions among the humanists and the Neoplatonic philosophers in the 15th century. Six Sibyls which Michelangelo painted on the ceiling of Sistine Chapel in Vatican, which are to be called their pictorial conclusion, are set with eight prophets of the Old Testament and show the universality of Christianity in the classical antiquity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	900,000	270,000	1,170,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：美学・美術史
キーワード：シビュラ、ラクタンティウス、バルビエーリ、フィチーノ、ミケランジェロ

１．研究開始当初の背景

(1) シビュラとは、元来は古代ギリシアの神殿において、神懸かりの状態で神々の意志を伝えた女性（巫女）のことを意味する。古代ローマ社会においては、災害時や国家の危機の際に、シビュラが語ったとされる託宣集がしばしば参照されたが、他方、紀元後２～４世紀に古代ユダヤ教徒やキリスト教徒の間で、シビュラに帰されたさまざまな予言が生みだされた。それらはのちに『シビュラの託宣』としてまとめられて中世のヨーロッパに伝えられた。中世後期においても、イタリアを中心として、キリスト教的な予言を核とした、シビュラの名前を冠した託宣集が幾種類も編纂され、当時の文学や芸術に多大な影響を及ぼした。

(2) 美術史的には11世紀にイタリア南部の都市カープアのサンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂にシビュラ像が描かれ、ゴシック時代に入って、フランスのオークセール大聖堂やラン大聖堂にもシビュラ像が刻まれた。また、13世紀のイタリアでは、ニコラ・ピサーノがピサの洗礼堂説教壇に、その子ジョヴァンニ・ピサーノがシエナ大聖堂ファサードとピストイアのサンタンドレア聖堂にそれぞれ作例を残している。他方、アンドレア・ピサーノは、フィレンツェ大聖堂の鐘塔の装飾のためにシビュラ像を制作している。さらに、ピエトロ・カヴァリーニは1285年頃に、ローマのサンタ・マリア・イン・アラチェーリ聖堂にシビュラが「天空の処女」を指し示す光景を描いている。

(3) ルネサンスに入るとイタリアでは、シビュラの図像が数多く描かれることになった。また、1420年代にローマのオルシーニ枢機卿邸に描かれた《12人のシビュラ》(現存せず)のように、中世ではティブルのシビュラとエリュトライのシビュラに限られていたシビュラの数も増加した。ギルランダイオによるフィレンツェのサンタ・トリニタ聖堂サッセッティ礼拝堂天上画や、ミケランジェロによるシスティーナ礼拝堂天井画はその著名な例である。さらに、バッチョ・バルディーニの銅版画集や、フィリッポ・バルビエーリの『聖なる博士たちヒエロニュムスとアウグスティヌスの不一致』に含まれた託宣集（木版画入り）も、シビュラの図像の発展において重要な役割を演じた。

(4) イタリア・ルネサンスにおけるシビュラに関する本格的な研究は、ホルダー＝エッガーの文献学的研究（1890）を踏まえた、エミール・マールの博士論文『いかにして近世の芸術家はシビュラを表現したのか』(1899)から始まった。その後、アンジェリーナ・ロッシの「イタリアの造形芸術におけるシビュラ」(1915)、マールの『フランスにおける中世末の宗教芸術』(1922)、フロントの『近代美術におけるシビュラ像の歴史についての研究』(1936) によって研究が深められた。そして、ド・クレルクが1978年から1981年まで『ベルギー歴史研究所紀要（ローマ)』や『アントウェルペン王立美術館年報』などに発表した５篇ほどのモノグラフは、それまでの諸研究を踏まえた、ルネサンスのシビュラ図像に関する網羅的な研究である。

(5) 申請者自身も『ヘルメスとシビュラのイコノロジー―シエナ大聖堂舗床に見るルネサンス期イタリアのシンクレティズム研究』(ありな書房、1992) において、古代からルネサンスにいたるシビュラ的伝統を概観するとともに、とりわけ、1480年代にシエナ大聖堂舗床に描かれたシビュラに関して、思想的・宗教的な背景のもとに、シビュラのテクストと図像の分析を行った。申請者はその後も引き続きイタリア・ルネサンスにおけるシビュラの研究を継続しており、とくに、15世紀におけるシビュラの興隆にあたって重要な役割を演じた、二種類のテクストと図像について調査・研究をおこなってきた。それらは、上述したオルシーニ枢機卿邸に描かれたシビュラ像を記述した『キリストの受肉に関する12人のシビュラの予言』とフィリッポ・バルビエーリの著作に含まれた託宣集である。

(6) 前者は現在、２種類の写本によって知られているだけであり、ヘリンの論考 (1936) において紹介されたテクストも部分的でしかない。申請者は、リエージュの修道院図書館に所蔵されている写本を　調査した。また、後者については、15世紀中に３つの版が、その後に少なくとも２つの版が刊行されており、それらの異同等について、大英図書館、ダーラム大学図書館、マンチェスター大学図書館、パリ国立図書館、マルチャーナ図書館（ヴェネツィア)、リッカルディアーナ図書館（フィレンツェ）で調査した。また、エミール・マールによって、刊本のもとになった写本として指摘されている、パリのアーセナル図書館所蔵の写本（ms.243）についても調査した。これらの調査の結果、『キリストの受肉に関する12人のシビュラの予言』は、中世のある託宣集と密接な関連をもち、旧約聖書の預言者とシビュラを並置する伝統に属していること、また、オルシーニ枢機卿邸の描かれたこれらのシビュラが、レオン・バッティスタ・アルベルティを通じて、リミニのテンピオ・マラテスティアーノの装飾に伝えられた可能性が高いことが判明した。フィリッポ・バルビエーリの著作に関しては、ド・クレルクが発表した校訂版には、シビュラの配列についての誤謬など問題点が存在すること、また、美術史的には、サンタ・トリニタ聖堂サッセッティ礼拝堂天上画に描かれたシビュラ像が、バルビエーリ第２版に基づいて描かれていることが判明した。

２．研究の目的

本研究は、申請者のこれまでの調査と研究に基づいて、イタリア・ルネサンスのシビュラについて、その展開と多様性について総合的に明らかにすることである。

(1) シビュラ像と中世的伝統との関係を明らかにする。図像的な観点からは、中世におけるシビュラ表現がきわめて限定されることもあり、ルネサンスのそれとの直接的な影響関係を見いだすことはむずかしい。他方、中世後期・末期には、いくつかのシビュラの託宣集が編纂され、その影響のもとにルネサンスにおいてはさらに新しい託宣集が成立した。こうした中世に遡る伝統の中で、ルネ

サンスに描かれたシビュラ像を位置づける。

(2) シビュラ像と同時代の文学的・思想的テクストとの連関を明らかにする。ルネサンスにおけるシビュラ像の頻出という事象の背景には、広範囲にわたるシビュラへの関心の増加が存在している。シビュラ像を同時代の文化的コンテクストの中で把捉するために、アウグスティヌスやラクタンティウスといったキリスト教教父から、マルシリオ・フィチーノやエジディオ・ダ・ヴィテルボにいたる思想的文脈を、またペトラルカからポンターノやサンナザーロへといたるイタリアの文学的伝統を考究する。

(3) シビュラ像の時代的な展開について明らかにする。いまは失われたオルシーニ邸に描かれた 12 人のシビュラ像から始めて、イタリア・ルネサンスのおける数多くのシビュラ像を、上述の文学史的な観点や思想史的観点をも踏まえつつ、網羅的にかつ系統的に分析する。最終的には、これまで定説が存在していない、システィーナ礼拝堂天井に描かれたシビュラ像に関して、説得力ある根拠を示しつつ、独自の解釈を試みる。

３．研究の方法

以下の観点に着目して研究を進めた。

(1) 古典古代・初期キリスト教時代におけるシビュラ文献の研究――①ギリシアの哲学者ヘラクレイトスからローマの文学者ウァロにいたるまでのシビュラへの言及、②ウェルギリウスの『牧歌』および『アエネイス』におけるシビュラへの言及とその影響、③初期キリスト教作家であるアルクサンドリアのクレメンス、アンティオキアのテオフィルス、ユスティノス、大グレゴリウス、そしてラクタンティウスとアウグスティヌスの著作におけるシビュラへの言及、④ユダヤ教徒とキリスト教徒による偽作である『シビュラの託宣』の内容と成立過程、およびその中世とルネサンスへの伝承。

(2) 中世シビュラ文献の研究――①130以上の写本が知られおり、ラテン語版のほかにもギリシア語版、エチオピア語版、アラビア語版が知られている『12人のシビュラの託宣』、②11世紀頃に成立したラテン語テクストで、ベーダ・ウェネラビリスの名の冠された『シビュラの言葉の解釈』、③12世紀にイタリア語版が成立し、1429年にヨアキム・ダ・フィオーレのサークルで改訂され、中世後期からルネサンスに強い影響力を与えた『エリュトライのシビュラの託宣』、④写本の状態でのみ存在している「託宣集」（パリ国立図書館 ms.f.fr.2362 、パドヴァ大学図書館 ms.201、パリ・アルセナール図書館 ms.78など）を始めとする、中世後期に作成されたシビュラの託宣。

(3) ルネサンス・シビュラ文献の研究――①「聖史劇」（ベルカラーリ『聖告』、『レヴェッロの受難』など）、②ローマのオルシーニ邸壁画に描かれた12人のシビュラに関するテクスト『キリストの受肉に関する12人のシビュラの予言』（リエージュ市立図書館、タンゲロー修道院図書館など）、③15世紀後半にフィレンツェで活躍したバッチョ・バルディーニの銅版画連作（12人のシビュラ像とテクスト）、④フィリッポ・バルビエーリが1481年に刊行した『聖なる博士たち、ヒエロニュムスとアウグスティヌスの不一致』（12人のシビュラ像の木版画を含む）およびその諸版。

(4) ルネサンスにおける文学・思想的背景の研究――①ラウタンティウス『神学大系』やアウグスティヌス『神の国』に見られる「シビュラの託宣」のルネサンスにおける受容、②フランチェスコ・ペトラルカ、レオナルド・ブルーニ、ジャンノッツォ・マネッツィ、クリストフォロ・ランディーノ、マッテオ・パルミエーリら、フィレンツェの人文主義者・詩人による言及、③ロレンツォ・ヴァッラ、プラティナなど、ローマの人文主義者・文学者による言及。④フィレンツェのプラトン・アカデミーの頭首マルシリオ・フィチーノの『キリスト教について』におけるシビュラ論と「古代神学」、⑤教皇庁における人文主義者・神学者、とりわけ、インギラーミとエジディオ・ダ・ヴィテルボにおけるシンクレティズム。

(5) シビュラ図像の研究――①ロレンツォ・ディ・ジョヴァンニ・ダンブロージョによる、フィレンツェ大聖堂装飾、②ロレンツォ・ギベルティによる、オルサンミケーレの壁龕に設置された　２体のシビュラ像、③アゴスティーノ・ドゥッチョによる、リミニのテンピオ・マラテスティアーノ内の装飾、④ドメニコ・ギルランダイオによる、フィレンツェのサンタ・トリニタ聖堂サッセッティ礼拝堂の天井画、⑤フィリッピーノ・リッピによる、ローマのサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂の天上画、⑥ペルジーノによる、ペルージャのコッレージョ・デル・カンビオの壁画、⑦ピントゥリッキオによる、スペッロのサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂の壁画、⑧ミケランジェロ、システィーナ礼拝堂天井画、⑨ラファエッロによる、ローマのサンタ・マリア・デッラ・パーチェ聖堂キージ礼拝堂の天上画、⑩サルッツァのカーザ・カヴァッサの壁画、⑪フラ・アンジェリコのサン・マルコ修道院壁画、⑫ロレンツォ・ギベルティによる、フィレンツェのサン・ジョヴァンニ礼拝堂門扉、⑬アンドレア・カスターニョによるヴィッラ・カルドゥッチ（フィレンツェ郊外）の壁画、⑭シエナ大聖堂の舗床に描かれたモザイク画。

４．研究成果

(1) 古代末に成立した『シビュラの託宣』のテクスト全体は中世には伝えられなかったが、その断片を含むラクタンティウス『神学大系』とアウグスティヌス『神の国』が大きな影響を及ぼしたこと、また、中世末期に現れた『エリュトライのシビュラの託宣』や『ティブルのシビュラの託宣』が流布しており、それらは「聖史劇」に影響を与えたことが確認された。そして、ルネサンスにおけるシビュラ復興の先駆となる、ローマのオルシーニ邸壁画に描かれた、銘文つきの 12 のシビュラ像が、これら古代・中世の複数のテクストと密接に結びついていることが明らかにされた。

(2) その後、リミニのテンピオ・マラテスティアーノ、フィレンツェのサンタ・トリニタ聖堂、シエナ大聖堂舗床、ローマのサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂などに描かれた複数のシビュラ像から、バッチョ・バルディーノの銅版画集やフィリッポ・バルビエーリのシビュラ集『ヒエロニュムスとアルグスティヌスの不一致』まで、15 世紀イタリアにおけるシビュラの興隆の背景には、ペトラルカやブルーニに始まる人文主義者、とりわけフィレンツェのプラトン・アカデミーの頭首であるマルシリオ・フィチーノの議論が存在することが明らかにされた。

(3) イタリア・ルネサンスにおけるシビュラ的表象の総決算と言うべき、システィーナ礼拝堂天井にミケランジェロが 16 世紀初頭に描いた６体のシビュラ像は、15 世紀における発展を踏まえつつも、とりわけ、教皇庁の神学者で、マルシリオ・フィチーノの哲学を受け継いだエジディオ・ダ・ヴィテルボの影響が看取され、そこでは、８体の旧約の預言者と併置されることによって、古典古代におけるキリスト教の歴史的な普遍性を説いていることが明らかにされた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

(1)伊藤博明「ラクタンティウスと『シビュラの託宣』」、査読無、『埼玉大学紀要（教養学部）』、46 巻２号、2010 年、21－38 頁

(2)伊藤博明「ティブルのシビュラ――中世シビュラ文献の紹介と翻訳（１）」、査読無、『埼玉大学紀要(教養学部)』、45 巻１号、2009 年、1－12 頁。

〔学会発表〕（計１件）

(1)伊藤博明「ティブルのシビュラとエリュトライのシビュラ」、ルネサンス研究会、2009 年７月４日、学習院女子大学

〔図書〕（計２件）

(1)Hiroaki Ito, The International Emblem: From Incunabula to the Internet, ed. by Simon Mckeown, 共著 Cambridge, 2010, 264-282 頁を執筆。

(2)伊藤博明、『哲学史の哲学』、岩波講座「哲学」14、共著、岩波書店、2009 年、197-230 頁を執筆。

〔翻訳〕（計５件）

(1)伊藤博明、エリカ・ラングミュア原著『天使』、ありな書房、2010 年、80 頁。

(2)伊藤博明、ピーター・Ｍ・デイリー原著『英国のエンブレムと物質文化／シェイクスピアと象徴的詩視覚性』, 埼玉大学教養学部・文化科学研究科, 2010 年、102 頁。

(3)伊藤博明、リナ・ボルツォーニ原著「『イメージの網――起源からシエナの聖ベルナルディーノまでの俗語による説教』、共訳、ありな書房、2010 年、342 頁。

(4)伊藤博明、オットー・ウェニウス原著『愛のエンブレム集』、ありな書房、2009 年、226 頁。

(5)伊藤博明、スーザン・Ａ・クレイン原著『ミュージアムと記憶――知識の集積・展示の構造学』、編訳、ありな書房、2009 年、286 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

伊藤　博明（ITO HIROAKI）
埼玉大学・教養学部・教授
研究者番号：70184679